

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00337

研究課題名(和文)大岡昇平文学の基礎的および総合的研究 構想ノート・原稿類を含む

研究課題名(英文)Reserch on the Literature of Shohei Ooka including the manuscripts

研究代表者

花崎 育代(HANAZAKI, Ikuyo)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00259186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：大岡昇平文学の研究において自筆資料までをその対象としたものは、当該研究者花崎による科研費課題(課題研究番号：21520217・平成21～24年度、2537026・平成25～29年度)以外はほぼ皆無であった。本研究はこの現状に鑑み、上記花崎の研究に連なるものとして構想ノートや原稿段階からの大岡文学の基礎的総合的研究を行った。『花影』の女主人公の孤絶化・孤高化への生成過程を平成30年度に論文として公開した。「逆杉」の構想の変更、「釣狐」の古典からの離陸と近代小説化の過程については令和5年度に論文公表の予定である。

これらの研究により大岡昇平文学の戦後期における作品生成の諸相を具体的に実証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本近代文学の代表的作家である大岡昇平の文学を、原稿や構想ノートの段階まで遡って研究、作品生成過程を詳細に検討した。また、調査を精密に行うべく、デジタル一眼レフカメラ撮影による複製作成を行った。

この研究の成果として、日本近代に生きる人間の思考過程を詳細にたどることができたことは大いに学術的意義があると考える。また、戦後期の劣化著しい紙媒体の唯一無二の資料である作家の原稿や構想ノートを、著作権継承者や所蔵館の許可を得て、上記撮影により記録し得たことは、文化財保護の観点からも社会的意義ある成果だといえる。

研究成果の概要(英文)： In the literature of Sohei Ooka's works, there were almost no study that included his own handwritings, except for that of HANAZAKI, Ikuyo which received the Science Research Grants (JSPS KAKENHI Study number : JP21520217, FY2009-FY 2012, JP2537026, FY2013-FY2017). In view of this situation, this project did a basic comprehensive research of Ooka's works including his conceptual notes and manuscripts, as a continuation as a continuation of Hanazaki's research mentioned above. The process that the female protagonist of "Kaei(The Shade of Blossoms)" was shaped into isolation was published as an article in FY2018. It is planed to publish an article in FY2023 on the changes in the concept of 'Sakasasugi,' and the process of altering 'Tsurui Kitsune' from a classic into a modern novel. These studies concretely demonstrated various aspects of the production of Ooka Shohei's literature in the post World War period.

研究分野：日本近代文学

キーワード：大岡昇平 草稿研究 戦後文学 日本近代文学 花影 釣狐 逆杉 デジタルアーカイブ

1. 研究開始当初の背景

日本近代文学を代表する作家のひとりである大岡昇平の文学研究においては、その作品における内容にかかわる改稿のおびただしい作品が多いにもかかわらず、その構想ノートや原稿まで視野に入れたものは、当該研究代表の花崎育代による科研費課題「大岡昇平文学の基礎的および総合的研究 構想ノート・草稿類を含む」(研究課題番号:2150217、平成21~24年度)「大岡昇平文学の基礎的および総合的研究 創作ノート・原稿類を含む」(研究課題番号:25370246)以前はほぼ皆無であった。

上記花崎科研以前の状況を簡潔に記しておく。活字資料の生成過程については、大岡昇生前に中央公論社版、岩波書店版の全集編纂実務を担った池田純溢氏が夙に『野火』について論文「生成過程における「文体」稿の位置」(『日本文芸研究』1971年)などで行っている。また吉田熙生氏も筑摩書房版全集(全23巻別巻1)を主導的に編纂し、本文異同につき「解題」等で報告している。本研究代表者の花崎も大岡の代表的な三作品『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』の連関を初出稿から探究した論文「大岡昇平 戦後の出発」(『国文目白』1984年)以降、単著書『大岡昇平研究』(双文社出版、2003年、第12回やまなし文学賞(研究・評論部門)受賞)にまとめた論考などで考察してきてはいた。しかしその先行研究における構想ノート・原稿類の調査は、畑有三氏が「構想ノートの検討」(『国文学』1968年)を、樋口覚氏が『一九四六年の大岡昇平』(新潮社、1993年)を、それぞれ翻刻活字化された資料で扱っている他、自筆資料については平松達夫氏が『三島由紀夫と大岡昇平』(朝日新聞社、2008年)で、ごく一部の草稿を参照しているといったあたりであり、きわめて少なかった。

こうした状況にあって、上記花崎の科研費を含む研究では、以下の成果をなし得た。すなわち、『俘虜記』等、大岡戦後最初期作品の原稿や構想ノート等自筆資料をデジタルカメラによる撮影を行うことにより詳細に分析、活字資料を含めた総合的な考察を行うことができた。デジタルカメラでの撮影は、戦後期の紙媒体の質的性格から資料劣化による研究不能の事態を早急かつ未然に防ぐ意味でまず喫緊かつ重要なものであった。また、この研究により、大岡自身が体験した俘虜という存在を大岡がいかに考えていったのかという問題を中心に精緻に考察することができた。そして、大岡文学においては当初は各作品に混在していたテーマが『俘虜記』『野火』『出征』などに分岐し、それぞれの作品において展開されたことを、実証的に論証した。たとえば未分化の問題が、「降伏」の問題は『俘虜記』で、「社会的感情」の問題は『野火』で追究するなど分化していったことなどである。詳細は上記時期の論文で論証したが、こうした大岡昇平の作家の出発期における作品生成を具体的かつ実証的に考究し得た。

しかし、大岡昇平の戦後期における膨大な作品の自筆資料を含む研究について、上述の花崎科研の成果は、いまなおその緒についたばかりというべきである。戦後出発期のみならずそれ以降の『花影』さらに『レイテ戦記』『ミンドロ島ふたたび』などや「釣狐」「逆杉」といった短篇を含む作品群の構想ノート・原稿類の調査研究も、資料劣化の問題も含め、まったなしの状況であり、これらの研究が次なる課題となっていた。

2. 研究の目的

本研究代表者花崎は、博士号を取得(2004年)(文学、日本女子大学)した「大岡昇平研究」(およびこれに基づいた前掲花崎単著『大岡昇平研究』)のほか、筑摩書房版『大岡昇平全集』第23巻(2003年)の「参考文献目録・主要参考文献解題」、河出書房新社『日本文学全集 18 大岡昇平』(2016年)の「大岡昇平年譜」をそれぞれ編纂著述、その他にも多くの大岡文学論文を執筆、発表し、特に2009-2012年度および2013-2017年度の前記科研を含む研究では、『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』『出征』また『花影』等に関する手稿段階からの研究も公表してきた。本研究ではこれまでの研究をふまえながら、さらに構想ノート・原稿類をも調査することを含む考究を進展させることによって、大岡文学の生成過程をはじめとして、より精緻な研究に発展させることを目的とした。

以下に少しく記す。

(1) 大岡昇平は夥しい改稿を有する作家であり、活字段階においてさえ頻回にわたっており、作品がつねに生成され続けていたことは改稿過程探究の重要性を明証している。このため、これの解明を軸とした研究を目的とした。

なお、具体的な活字段階の改稿としては、たとえば『野火』において中断を含む初出誌の段階(雑誌『文體』、雑誌『展望』)においても、冒頭の大膽な削除(いわゆる「初出導入部」の削除)を含む大幅な改稿を行っていること、『花影』において、エピグラフを初出誌(『中央公論』)では、「ラシーヌ」による文言であったものを、単行本以下では<Dante>によるものに変更するという大きな改稿の他にもさまざまな加除がみられること、などが挙げられる。

(2) 大岡昇平の自筆資料の多くは神奈川近代文学館に収蔵され「大岡昇平文庫」などとして公開されている。しかし、最新の全集である筑摩書房版『大岡昇平全集』全23巻別巻1の刊行が2003年8月までを要し、その後の受け入れ、整理となったため、研究者による本格的な調査は、2009年度から2012年度まで、および2013年度から2017年度まで、の、上記本研究代表者花崎による科研を含む研究がほぼ端緒という段階であった。よって、上記科研の後継的研究とし

て、資料ごとの詳細な調査を行い、大岡文学生成過程を中心とする研究をより進展させることを目的とした。

(3) 日本近代文学における、活字化されていない草稿等の資料研究としては、本研究開始時において、フランス文学における生成研究を応用したものへの注目から進んでいったといえる。松澤和宏氏(フローベル研究を応用した夏目漱石研究)、吉田城氏(ブルースト研究を応用した芥川龍之介研究)などである。その後、堀辰雄に関する渡部麻実氏の考究なども登場した。「生成論は方法や理論である前に、なによりもまず新たな対象の発見と構築」(松澤『生成論の探究テキスト 草稿 エクリチュール』、名古屋大学出版会、2003年、p.65)とされるように、構想ノート・原稿類から活字テキストへの変遷、さらなる活字段階での改稿、と、その豊富な異同を発見し調査し、検討を加えることで、作品の豊饒さを精緻に読み込むことを目的とした。

(4) 自筆資料の検討においては現物を丹念に調査することが肝要である。しかし本研究が主な対象とする敗戦直後からの戦後資料は、媒体(原稿用紙やノートなどの紙)の素材の品質が劣るだけでなく、経年劣化の著しさによって頻回の詳細な調査に堪え得ないものと判断された。よって、将来的にも大岡昇平文学研究のみならずひろく近代文学研究において貴重な資料を保存するという観点においても、現物を重視しつつもデジタルカメラ撮影資料による検討によって、資料保全と探究の両立をめざした。

3. 研究の方法

研究の目的を達成すべく、大岡昇平の活字資料とともに構想ノート・原稿・校正刷書込み・全集書込み等自筆資料、また大岡旧蔵資料等の探究という方法を採用した。

活字資料については、過去三回の大岡昇平全集(中央公論社版、自選選集の岩波書店版、筑摩書房版)はじめ公刊された大岡著述資料、また大岡に関する研究書籍や関連書籍等の参考資料を研究材料とし、読解考究した。必要に応じて日本近代文学館(東京都)、神奈川近代文学館(神奈川県)等に赴き、複写できるものについてはこれを行うなど、読解していった。

自筆資料や大岡旧蔵資料については、この多くを所蔵している神奈川近代文学館を中心に赴いて調査考究、一眼レフデジタルカメラによる撮影の可能なものについてはこれを行うなどして、精緻な作品分析と考察を行うよう努めた。

自筆資料の読解には資料劣化の問題だけでなく、書き手の特性も結果に作用する。本研究の対象である大岡昇平の自筆資料に関しては、活字で削除された箇所のある資料が多いなどの重要性の一方で、文字が小さいことや略字が頻繁に用いられていることで、困難な部分も多く存在した。こうした判読困難な文字の読解の場合には、活字資料に自筆原稿の文字のまま定着した文字を参照し、これを用例として、確定作業を行う、という方法を採用した。

このように活字資料、自筆資料等を総合的に考究するという方法によって、異同 ヴァリエーション豊富な振幅ある大岡文学テキストのより精緻で豊かな読解の開拓をめざした。

4. 研究成果

日本近代文学を代表する作家のひとりである大岡昇平の文学研究において、これまで花崎の前記科研(2009-2012年度、2013-2017年度)による研究以外はほぼ皆無であった自筆資料を含む総合的研究を進展させた。全世界的な感染症の流行とその対策による文学館等の閉館や移動の制限等により、一時は研究の進展に難渋したものの、特に代表作『花影』等を有し、かつ、資料劣化の懸念から緊急性を要する昭和三十年代から四十年代前後を中心とした自筆資料をデジタルカメラによる撮影を行うことにより詳細に分析、活字資料を含めた総合的な考察を行うことができた。この考究により、『花影』においては、主人公葉子の造型として、他者への「怨み」をいったんは記述しながら削除していることが判明したことで、孤高の人物としての造型、作者曰く「ワンウーマン小説」が、辛苦を他者に転嫁しないという側面からも証明されたことは重要である。

ところで、当初の予定を超えた発見として、大岡昇平の戦後作品「長い歯を持った男」「妻の証言」原稿がある。本研究期間中に、該原稿が古書市場に出たことが判明、日本にとどまらず世界の文化的資産ともいえる唯一貴重な資料が、私有化あるいは散逸することもやむを得ない仕儀に至った。本代表研究者花崎は、公的機関での所蔵による資料保存と研究促進をめざすべく、急遽、本科研費により購入した。現在調査分析および考究中である。

なお著作権継承者により、検証した自筆資料の影印の出版や全文翻刻引用掲載は基本的に許可されなかったが、デジタルカメラによる撮影と論証に必要な最低限の翻刻引用掲載は許可を得ることができた。こうしたご遺族 著作権継承者のご理解にもよって、本研究が可能となっていることも付記しておきたい。

また、神奈川近代文学館所蔵等の大岡昇平自筆資料のデジタルカメラによる撮影については、内藤由直、國本英花、谷川直美、松原大介、檀彩里、畑中千奈、岡部佑杏、佐々木梓、山口絢加の各氏の助力を得た。

以下に本研究の具体的な成果を記す。

(1) 『花影』は作者自ら、後に「ワンウーマン小説」(「わが文学に於ける意識と無意識」、1966年12月)と述べる作品である。本研究代表者花崎は過去の論文において既に、初出稿から単行本へという過程において、男性たちなど周辺人物と葉子、といった風俗小説的なものから葉子主体の小説へ、という変化があることを実証的に検討してきてはいた。本研究において

はさらに原稿段階にまで遡ることによって、葉子の孤高的造型が明らかになった。すなわち、たとえば遺書を書こうとする末尾近くの段になって、葉子が急に保護者の人物高島を「うらんでゐないと、書き残す」とする唐突さが、実は初出中盤時点の原稿で高島への「怨み」と書きかけてこれを削除していたことを確認することで、葉子の孤絶が、誰かを「恨」むといった他責的心情を軸とせず、孤高的いわば自尊心の発露として示されたものであることを明証した（「大岡昇平『花影』の生成」）。

（２） 大岡戦後作品「幼年」の東京とともに、戦前の作品である「青春」を考察。この作品において、大岡は、大学生時代に居住した京都について、富永太郎の詩に導かれ、「木橋」に象徴される風物に「淋しさ」を感じ、東京の赤黒い土とは違う「あまりに白すぎる土の色」や富士山のような突出した山はないが「三方山」の地形に閉塞と違和を感じている。しかしそうしたマイナスイメージの一方で、疎水の水を「愛する」と語っていった。それは北へと鴨川と逆方向に流れる「人工の流水」である。大岡は、京都の近代化の一大事業であり自然に逆行して「ぐんぐん」流れる疎水に、首都としてまず近代化を推進した東京に通じるなにかの力を見出したのだという可能性をみた。さらにそうした力を感得したことが、京都の疎水を、戦後作品「黒髪」において、自殺未遂経験のある女性が、生きていこうとする原動力として、すなわちプラスの価値を有するものとして、いきいきと描かしめたといえると結論づけた（「大岡昇平における〈京都〉」）。

（３） 主に21世紀に入ってからの大岡昇平の研究動向について、先行する研究動向に後続するかたちで、作品別、研究手法別等の分類も行いつつ叙述した（「大岡昇平 研究動向」）。

（４） 「釣狐」「逆杉」といった大岡短篇作品の原稿調査によって、その古典作品の受容と近代小説への生成過程や構想の変化を考究することができた。論考を2023年度に公刊する予定である。

（５） 『レイテ戦記』『ミンドロ島ふたたび』等の原稿等について調査を行い、上記「釣狐」「逆杉」等短篇を含む作品群とともに、著作権継承者および所蔵館の許可を得て、世界的感染症流行下において感染対策に十分に留意しながら、デジタル一眼レフカメラによる撮影を行うことができた。昭和戦後の紙媒体かつ唯一無二の自筆資料が劣化することによって研究困難状況に至りかねない危惧を、解消するための一助となし得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 -
2. 論文標題 「熱い雪」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 秋山駿・原善・原田桂編、鼎書房、三浦哲郎全作品研究事典	6. 最初と最後の頁 22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 -
2. 論文標題 「義妹」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 秋山駿・原善・原田桂編、鼎書房、三浦哲郎全作品研究事典	6. 最初と最後の頁 78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 -
2. 論文標題 「春の舞踏」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 秋山駿・原善・原田桂編、鼎書房、三浦哲郎全作品研究事典	6. 最初と最後の頁 190/191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 79
2. 論文標題 研究動向 大岡昇平	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 昭和文学研究	6. 最初と最後の頁 126/129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 122
2. 論文標題 大岡昇平のおける<京都> 木橋を踏む淋しさと愛する疎水の風景	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 279/293
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 18
2. 論文標題 大正一三(一九二四)年を中心に 横光利一と小林秀雄	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 横光利一研究	6. 最初と最後の頁 55/58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 95(4)
2. 論文標題 大岡昇平『花影』の生成 初出原稿からの考察 子供の声・「怨み」の削除・葉子の孤絶	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國語と國文學	6. 最初と最後の頁 3/19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 -
2. 論文標題 「大岡昇平」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本近代文学館編、(講談社、)「日本近代文学大事典」増補改訂デジタル版	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 -
2. 論文標題 「大国主命」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 安藤宏・大原祐治・十重田裕一編、勉誠出版、坂口安吾大事典	6. 最初と最後の頁 133/134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 -
2. 論文標題 「戦後文章論」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 安藤宏・大原祐治・十重田裕一編、勉誠出版、坂口安吾大事典	6. 最初と最後の頁 286/286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 -
2. 論文標題 「大岡昇平」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 安藤宏・大原祐治・十重田裕一編、勉誠出版、坂口安吾大事典	6. 最初と最後の頁 546/546
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 花崎育代	4. 巻 -
2. 論文標題 「戦後文章論」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 安藤宏・大原祐治・十重田裕一編、勉誠出版、坂口安吾大事典	6. 最初と最後の頁 576/577
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	内藤 由直 (NAITOU Yoshitada) (60516813)	立命館大学・文学部・教授 (34315)	撮影
研究協力者	松原 大介 (MATUBARA Daisuke)	立命館大学・大学院文学研究科・院生 (34315)	撮影
研究協力者	佐々木 梓 (SASAKI Azusa)	立命館大学・大学院文学研究科・院生 (34315)	撮影
研究協力者	國本 芙花 (KUNIMOTO Fuka)	立命館大学・大学院文学研究科・院生 (34315)	撮影
研究協力者	谷川 直美 (TANIGAWA Naomi)	立命館大学・大学院文学研究科・院生 (34315)	撮影
研究協力者	檀 彩里 (DAN Chisato)	立命館大学・大学院文学研究科・院生 (34315)	撮影
研究協力者	畑中 千奈 (HATANAKA China)	立命館大学・大学院文学研究科・院生 (34315)	撮影

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岡部 佑杏 (OKABE Yuan)	立命館大学・大学院文学研究科・院生 (34315)	撮影
研究協力者	山口 絢加 (TAMAGUCHI Ayaka)	立命館大学・大学院文学研究科・院生 (34315)	撮影

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関